

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	基礎と臨床をつなぐ架け橋を目指して
別タイトル	Department of Pathology: To be a bridge between basic and clinical medicine
作成者(著者)	三上, 哲夫 / 深澤, 由里
公開者	東邦大学医学会
発行日	2020.12.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 67(4). p.150-151.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	教室(診療科)紹介
著者版フラグ	publisher
JaLCOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019_066
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD48309823

教室(診療科)紹介(119)

基礎と臨床をつなぐ架け橋を 目指して

病理学講座

教授：三上哲夫
赤坂喜清
准教授：本間尚子
講師：深澤由里

東邦大学医学部病理学講座は、1925年の開学時に木村哲二教授により創設されました。1927年には、木村教授自らが執刀された最初の病理解剖の記録が残されています。その後、病理学講座は大場勝利教授、西井烈教授、薄田七郎教授に引き継がれた後に、1956年に二講座制となりました。第一病理は西井烈教授、福永昇教授、秋間道夫教授、第二病理は嶋田博教授、川村貞夫教授、佐々木憲一教授、三浦妙太教授（直ぐに後述の中央検査部病理部長に移籍）、石井壽晴教授が主催されてきました。1975年頃には、臨床医学の一分野として病理診断の重要性が認知され始めたことから、現在の病院病理学講座の母体の一つとなる中央検査部第2部が設立され、1979年には大橋病院病理部が、その後佐倉病院にも病理診断科が開設されました。当時から継続して、医学部、大森病院、大橋病院、佐倉病院と協力して、研究、教育、病理診断を遂行してきました。この時代は人もたくさんおり、従来型の病理学実習やカンファレンスの形式を保ち、ゆったりとした時間が流れていたようです。その後、大学の機構改革の一環として第一病理学講座と大森病院病理学講座が統合され病院病理学講座に、そして第二病理学講座が現在の病理学講座となり現在の形になりました。2013年4月より三上哲夫が教授に就任し、現在、本間尚子准教授、深澤由里講師、金田幸枝助教、技術員2名と、大学院生、研究生が在籍しています。また、先端医科学研究センター・組織修復・病態制御学研究室の赤坂喜清教授が当講座より出向しており、密に協力して講座運営をしています。ラボは医学部2号館4階に病院病理

学講座と共にありますが、2018年にその一部を学内研究支援の一環として私立大学研究ブランディング事業および両講座共同の出資により、形態試料分析室を整備して、東邦大学医学部総合研究部の一部門として組織標本作製に関して研究協力を行っています。

病理学講座では、「教育」「診断」「研究」の3本柱で日々業務を行っています。教育についてですが、病理学というものには基礎医学と臨床をつなげる架け橋的な存在と考えています。組織学、解剖学をもとに、疾患の肉眼的な所見(差異)・組織学的な所見(差異)を見つけ、それを総合的に理解することで疾患・患者の病態理解に繋げたい。病理学というと病理学実習のスケッチのイメージが強く、「顕微鏡をみているだけでつまらない」と思われがちです。しかし、顕微鏡での観察だけでなく、いろいろな情報を総合的に考え併せて病態を理解することを目的として、通常の講義、実習だけでなく、2年次の病態の科学実習III(病理学)ではアクティブラーニングを意識した症例検討実習を行っています。具体的には、グループごとに異なる病理解剖症例を担当し、臨床経過、肉眼所見、組織学的所見、総合的解釈と医学知識をグループワークでまとめて発表してもらいます。学生に病理学を通じて、それ以降で学ぶ臨床科目での病態の理解を深められるようになってもらいたいと思っています。

病理診断に関しては、医療センター大森病院の病理診断科の非常勤として病院病理学講座の先生方と共に病理診断と病理解剖を行っています。病理診断業務では、全臓器を



2020年9月 講座集合写真 医学部2号館4階の講座にて

担当せねばなりません。その中で三上は腎生検、本間は乳腺疾患病理のコンサルトを受け専門性を生かして診断業務を担っております。また連携施設である大森赤十字病院の病理解剖業務・CPCを担当しており、地域病院への貢献も行っています。

研究に関しては、三上は消化管の腫瘍、特に潰瘍性大腸炎関連大腸癌について検討しています。本間はエストロゲン受容体と悪性腫瘍について、特に高齢者の癌の分子病理学的解析を他施設と共同して研究しております。深澤は悪性腫瘍と血管の関係、特に大腸癌の脈管侵襲についての分子病理学的な研究を行っております。

病理学、特に悪性腫瘍の病理診断は近年の遺伝子解析などの技術革新により大きく変化しています。しかし、形態的な観察の重要性が低下しているわけではなく、それらの観察力を生かし、そこに分子生物学的な技術を取り込むことで発展が望める学問と考えております。医学生、研修医、大学院生など若い方々に病理学の面白さを少しでもわかってもらい、臨床における病理学の重要性、そして絶滅危惧種となりつつある病理医が少しでも増えるように指導していきたいと思っております。

(三上哲夫, 深澤由里)

DOI : 10.14994/tohoigaku.2019-066